

凡河内躬恒歌の受容

—『後撰集』における—

西山 秀人

Nishiyama Hidehito

要 旨

『古今集』撰者の一人、凡河内躬恒の和歌表現が、『後撰集』所載歌にどのような形で受容されているかについて考察したものである。その結果、『古今集』入集歌はもとより『躬恒集』所載歌の表現も多く摂取されており、当時における躬恒歌の流布状況を示唆していることが指摘された。

【キーワード】 凡河内躬恒 古今集 後撰集 躬恒集

一、はじめに

凡河内躬恒は『古今集』撰者として同集の編纂事業に携わり、『古今集』入集歌数は貫之の一〇二首に次いで六〇首⁽¹⁾を数える。八代集

においては、後撰二三首、拾遺三四首、新古今一二首であり、『古今集』に次いで『拾遺集』が躬恒の歌を多く採歌していることが知られる。ちなみに、『拾遺抄』では躬恒歌を二五首も採歌しており、『拾遺集』はその方針を踏襲したものと目されるが、これは藤原公任の躬恒に対する評価と軌を一にしている。公任の編んだ『三十六人撰』『三十六人撰』では人麿・貫之・伊勢と並んで一〇首を選び、『新撰髓脳』では「貫之、躬恒は中比の上手なり。今の人のこのむ、これがさまなるべし」と述べ、『九品和歌』『中の品』では『古今集』所載の躬恒詠「立ちとまり見てを渡らん紅葉葉は雨と降るとも水はまさらじ」⁽⁴⁾を例歌として引いている。

また、河原院の庵主安法法師の家集には、

この河原院に、むかし、むつの国にしほがまのうら、うきしま、まがきのしま、うつしつくられたりければ、おとどかくれたま

ひて後、躬恒貫之などきつつよめりければ、それがいとかぎり
なければ、……
(安法法師集・一二詞書)⁽⁵⁾

とあり、ここでは『新撰髓腦』とは逆に躬恒の名が最初に挙げられて
いる。⁽⁶⁾これはあるいは『千穎集』序の一節、

天禄比生、年七八歳、始習和歌、猶可植於躬恒之古曲、礼朝示
仲道侵祚成

すなわち躬恒の古歌を指すべき歌境とし、それを中道として当時
の歌風を改革していく⁽⁷⁾という意識に関わるものなかもしれない。

さらに、時代は下るが、『無名抄』には三条大相国(藤原実行)
と二条の帥(藤原俊忠か)が貫之・躬恒の優劣を論じた際、判断を
求められた源俊頼が「躬恒をば、な侮り給ひそ」「躬恒をば侮らせ
給ふまじきぞ」⁽⁸⁾と繰り返したという逸話が載せられている。該話の
信憑性はひとまず措くとしても、後世において躬恒が貫之にひけを
取らぬ評価を得ていたことの傍証にはなるう。⁽⁹⁾

このように、『古今集』以後は常に貫之とともに併称され、時と
して貫之をもしのぐ評価を得てきた躬恒であるが、その和歌表現は
次代の歌人詠にどれほどの影響を及ぼしているのだろうか。彼ら
に連接する後撰集時代の和歌に焦点を絞ると、個々の歌人研究にお
いて言及されることはあっても、⁽¹⁰⁾躬恒の側から考察した論は知られ
ないようである。そこで、本稿では躬恒歌受容の具体相を把握する
第一歩として、『後撰集』の歌を中心に検討してみたいと思う。

二、古今集歌との関連

後撰集歌の表現分析については片桐洋一氏の卓論⁽¹¹⁾がある。氏は、
既成表現を手本として歌を詠むいわゆるハーフメイド的和歌作法の
メカニズムを解き明かし、「それは素人の和歌の集成たる『後撰集』
にまさしくふさわしい特性」と位置づけている。たしかに、躬恒歌
との関係に絞ってみても、片桐論が掲出する、

①しらゆきのつもる思ひもたのまれば春よりのちはあらじとおも

へば (後撰・恋六・一〇七一・不知)

(a) 君が思ひ雪とつもらばたのまれば春よりのちはあらじとおも

へば (古今・雑下・九七八・躬恒)

をはじめとして、

②郭公暁がたのひとこゑはうき世の中をすぐすなりけり

(後撰・夏・一九七・不知)

(b) 郭公我とはなしに卯花のうき世の中になきわたるらむ

(古今・夏・一六四・躬恒)

③しら山に雪ふりぬればあとたえて今はこしちに人もかよはず

(後撰・冬・四七〇)

(c) ゆきふりて人もかよはぬみちなれやあととはかもなく思ひきゆ
らむ (古今・冬・三二九・躬恒)

④もみぢばをぬさとたむけてちらしつ秋とともにやゆかんとす
らん
(後撰・離別・一三三八・大輔)

(d)道しらはたづねもゆかむもみぢばをぬさとたむけて秋はいに
けり
(古今・秋下・三二三・躬恒)

のような例が挙げられ、後撰集歌がいかに古今集歌に依存して成り立っているかが今さらながら看取される。

①は藤原兼輔の贈歌に対する女の返歌。兼輔を恨んで親のもとに帰っていた女のとこに、雪深い朝、車をやって迎えに行かせたが、その消息に添えたのが「白雪の今朝はつもれる思ひかなあはでふる夜のほどもへなくに」の一首である。当該歌はその返歌という体をなしているが、『兼輔集』は諸本ともに返歌を持たない。詞書にしても部類名家集本(Ⅲ)¹²⁾と坊門局筆本(Ⅳ)は『後撰集』詞書と同一内容であるものの、他伝本は「女のもとよりいて、ほともなくゆきのいたうふりければ」(Ⅰ)¹³⁾、「女のもとよりつとめていて、程なくゆきのふりたれば」(資経本・Ⅱ)¹⁴⁾をんなのもとよりかへり侍しにほともなくゆきのいみしくふりはへしかは」(唐草裝飾本)¹⁵⁾のようである。おそらくは片桐氏が指摘するように、前引兼輔詠「白雪の今朝はつもれる」に(a)を改作した一首を付して、贈答に仕立て上げたのであろう。

②は「世の中」に「夜の中」を掛け、「夜中ではなくて、暁方待って鳴くその理由を諷刺的にとりなした」¹⁷⁾歌とみられるが、「郭公」「憂き世の中」という詞句の取り合わせは(b)に依拠したものとみてよい。

もつとも、「憂き世の中」については、

あさ露のおくての山田かりそめにうき世の中を思ひぬるかな

(古今・哀傷・八四二・貫之)

葦引の山のまにまにかくれなむうき世中はあるかひもなし

(同・雑下・九五三・不知)

わが身からうき世中となづけつつ人のためさへかなしかるらむ

(同・雑下・九六〇・不知)

のごとく『古今集』においてはすでに熟した表現として定着を見せしており、『後撰集』にも当該歌のほか二首(一一二五業平・一一六六不知)に見られるが、郭公の様態を表すのに用いた例はきわめて少ない。やはり②は(b)の受容歌であると考えてよいだろう。

③は「式部卿敦実の親王しのびて通ふ所侍りけるを、のちのち絶えだえになり侍りければ、妹の前斎宮の親王のもとより、このごろはいかにぞとありければ、その返事に、女」と詞書され、『大和物語』九五段にも見えている。後者では「おなじ右のおほいどのの御息所、帝おはしまさずなりてのち」とあり、これに従えば作者は三条右大臣定方女、醍醐天皇女御の源能子で、醍醐天皇薨後の詠歌ということになる。「雪降り」「人もかよはず」「跡」の語句が(c)と一致し、また接尾語「路」と「道」も類語に相当することから、当該歌は(c)を念頭に置いての詠とみてよいであろう。

④は承平三年(九三三)九月二六日、醍醐天皇皇女雅子内親王の斎宮群行に際して「供なる人に、幣つかはすとて」詠んだ大輔の饞

別歌。紅葉を幣として手向けるといふ発想自体は、

秋の山紅葉をぬさとたむくればすむ我さへぞたび心ちする

(古今・秋下・二九九・貫之)

このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに

(同・羈旅・四二〇・道真)

などにも見受けられるが、躬恒詠(d)とは「もみぢばをぬさとたむけて」というフレーズはもとより、「秋とともにや行かん」「秋は去にけり」に惜秋の情を込めた点も共通している。当該歌は(d)を直接受容したとみて差し支えなからう。

以上は二句の表現が一致あるいは類似している例を挙げたが、次に見るように語句レベルでの撰取もある。

⑤心あてに見ばこそわかめ白雪のいづれか花のちるにたがへる

(後撰・冬・四八七・不知)

(e)心あてにをらばやをらむはつしものおきまどはせる白菊の花

(古今・秋下・二七七・躬恒)

「心あて」については躬恒の(e)を遡る用例が探せないことから、⑤が(e)を撰取しつつ、白菊と初霜の紛れを雪と花の見立てに置き換えた詠であることは明白であろう。

もつとも、これらの例はあくまでも古今集歌の受容という観点から説明がつくものであり、作者躬恒に対する特別な意識は感じられ

ない。片桐氏が指摘するように、「とにかく人口に膾炙した「既成の表現」を好んで用いる傾向」¹⁹⁾が反映されたものと捉えておくべきであろう。

では、『躬恒集』所載歌との関係はどうであろうか。次節ではその点について考察してみたい。

三、家集歌との関連

後撰集歌の多くは古今集歌をはじめとする既成表現の再構築によつて成り立っているといつてよいが、そうした先行表現の中には上掲古今集歌のみならず躬恒集歌も存外多く含まれている。まずは二句の表現が一致あるいは類似している例を挙げてみよう。

⑥心もてをるかはやな梅花かをとめてだにとふ人のなき

(後撰・春上・二一九・不知)

(f)かをとめてたれをらさらむむめのはなあやなしかすみたちなかくしそ

(躬恒集③三〇三⑦一三二)

当該歌は詞書に「男につきてほかに移りて」とあるように、自らの意志ではなく男に従つて他所へ移つたにもかかわらず、一向に訪ねて来ない不誠実な態度を難じたものだが、「をる」「梅花」「香をとめて」「あやな(し)」の語句が(f)と合致する。「をる」については、「居る」と解したほうが分かりやすいが、梅花にちなんで「折る」意も響かせていよう。ちなみに、(f)は延喜一五年(九一五)齋院恭子内

親王に調進された屏風歌だが、その詠みぶりは梅花を香りのものとみる、

月夜にはそれとも見えず梅花かをたづねてぞしるべかりける

(古今・春上・四〇・躬恒)

春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる

(同・四一・躬恒)

に依拠していよう。²⁰⁾ しかしながら、当時類型化していた「花を隠す霞」という趣向を梅花詠に援用した点には新味が感じられ、そのせいか、

かをとめてをりこそしつれむめの花春の霞は立ちかくせども

(近江御息所歌合〔延喜末年〕延長八年)・一)

のような受容例も現れている。当該歌も上掲例と同じく当時人口に膾炙していた表現を折にふさわしい形で撰取したと考えるべきだろう。

⑦つねよりもどけかるべき春なればひかりに人のあはざらめや

は (後撰・春下・一三六・実頼)

(g)つねよりもどけかりつるはるなれどけふのくるるはをしくもあるかな (躬恒集⑦二七二)

当該歌は「やよひに閏月ある年、司召のころ、申文に添へて左大臣の家につかはしける」と詞書された貫之の贈歌「あまりさへありてゆくべき年だにも春にかならずあふよしもがな」に対する実頼の返歌である。贈歌のみは『貫之集』にも見え、詞書には「三月ふたつある年、左大臣実頼の君にたてまつる」とあることから、藤原実頼が左大臣在任中の天慶五年(九四二)の詠とみられる。晩年の貫之は実頼邸に出入りし、その庇護を求めていたが、貫之詠が実頼の後押しを求めているのに対して、当該歌はあたりさわりのない返答に終始している。その際に依拠したのであるう躬恒詠(g)だが、実はこの歌もⅢ類本詞書には「三月ふたつある年」とあり、躬恒の活動時期を考慮すると延喜四年(九〇四)の作となる可能性が高い。²²⁾ ちなみに、(g)は『拾遺抄』に「三月に閏月侍りけるつごもりの日、よみ侍りける 躬恒」(春・五四)、『拾遺集』に「閏三月侍りけるつごもりに みつね」(春・七八)として採歌され、両集とも春部の巻軸にこの歌を置いている。おそらく(g)は閏三月末に詠まれた惜春の歌として当時人口に膾炙しており、実頼はその上句を借用したのではなからうか。ちなみに、(g)の下句に類似する表現は、

三月つくる日

こん年もくべき春とは知りながらけふのくるるはをしくぞ有りける (貫之集③四一三、天慶二年内裏屏風歌)

春のくるる日仰にてつかうまつれり

こむ年のためにはいぬる春なれどけふのくるるはをしくぞ有りける (同・九〇八)

うるふ九月に、うちにてわかれをしむころ

あきの日のひかすまされるとしなれど今日のくるるはをしくぞ
ありける (清正集・四二)

のように、同時代あるいは後続の詠歌にも散見され、清正詠は明らかに閏月を意識した表現がとられている。右の例をも勘案すれば、(g)は閏月を詠んだ一首として早くから注目を集めていたと考えるとよさそうである。

⑧今ははやみ山をいでて郭公けぢかきこゑを我にきかせよ

(後撰・恋五・九五〇・実頼)

(h)今ははやなきもしにけむほととぎすまづはつ声をたれかきき
けん (躬恒集⑦八八)

(i)はつこゑをわれにきかせよほととぎすまづはたほかになかん
とすらん (躬恒集I「光俊本」一九四)²³

当該歌も実頼詠で、④既出の作者大輔への贈歌であるが、「今ははや」「郭公」という語句の組み合わせは、躬恒詠(h)に依拠している可能性がある。また、郭公に対してその声を「我にきかせよ」と呼びかけた例も珍しく、先蹤詠では『躬恒集』所載の(i)を挙げるとどまる。もともと、(i)についてはⅢ・Ⅳ類本が下句を「まづはつなきをわれにきかせよ」としており、本文が不安定である点疑問も残るが、ひとまずⅠ類光俊本の本文にしたがっておきたい。(h)・(i)が当時人口に膾炙していた形跡は今のところ見出し得ないが、少な

くとも(h)からの表現摂取については十分予想できよう。

⑨かずならぬ身は山のはにあらねどもおほくの月をすぐしつるかな
(後撰・恋五・九六六・不知)

(j)かりてほす山田のいねをかぞへつつおほくのとしをすぐしつるかな
(躬恒集⑦九)

当該歌は「人を思ひかけていひわたり侍りけるを、待ちどほにのみ侍りければ」と詞書され、女に懸想しながらも虚しく月日を過ごす我が身を、月の入る「山の端」になぞらえた歌である。下句にみる「おほくの」をすぐしつるかな」というフレーズは、現存資料による限りでは躬恒詠(j)が嚆矢である。この歌は『拾遺抄』(雑上・四一七)に「延喜御時月令御屏風歌」として採られており、家集においてもⅣ類の西本願寺本以外は八首前の「内御屏風和歌」(Ⅰ光俊本)の詞書を受けていると推察される。上掲(f)と同様屏風歌である点は興味深いが、あいにく下句に異同があり、Ⅲ類本を除く他伝本および『古今六帖』(二・山田・九六八)、『拾遺抄』(雑上・四一七)²⁴では「つみてけるかな」の本文である。「稲」との関連では「つみてけるかな」に整合性が認められるが、『万代集』(秋下・一〇六七)ではⅢ類本と同様結句を「すぐしつるかな」とし、後続の和歌には、

かずならぬ身をうち河のあじろ木におほくの日をもすぐしつるかな
(拾遺・恋三・八四三・不知)

年ごとに七夕つめをいのりつつおほくの秋をすぐしつるかな

(兼盛集・一八四)

いでいるとよそにはみつつ雲ゐにておほくの日をもすぐしてし
かな

(宇津保物語・葦開下・八〇四)

のような例も見出されることから、早くから兩本文が流布していた
ものか。ただ、いずれにしても「多くの月を」あるいは「多くの年
を」を四句に据えた先行例を(j)以外に探し得ないことを鑑みると、
当該歌が(i)に依拠した可能性はないとはいいい切れまい。

なお、「つみてけるかな」の本文に注目すれば、『後撰集』の、

9. 山人のこれるたきぎは君がためおほくの年をつまんとぞ思ふ

(後撰・慶賀・一三八〇・不知/円融院御集)

との関連もあわせて指摘されよう。

⑩ 宮人とならまほしきを女郎花のべよりきりのたちいでてぞくる

(後撰・雑三・一一九九・不知)

(k) みやびとのかずはしりにきをみなへしいづらとはばいかが
こたへむ

(躬恒集③一八七)

当該歌は『師輔集』にも「いかなる折にか」の詞書で収められて
いるが、何分にも詠歌状況がつかみにくく、「宮中で、新參の美し
い女房に、気軽に詠みかけた歌であろう」(木船重昭氏²⁶)、「女の宮

仕えを邪魔する人があることを訴えた」(片桐洋一氏²⁷)、「宮中に移
し植えられた女郎花を宮中に憧れる女性に見立てたか。或は、宮中
の行事などを見物に來た女性を女郎花に見立てたか」(工藤重矩氏²⁸)
など、種々の理解が行われている。秋霧が女郎花を隠すという趣向
自体は、

人を見る事やくるしきをみなへし秋ぎりにのみたちかくるらむ

(古今・秋下・二三三・忠岑)

秋霧のはるるはうれしをみなへし立ちよる人やあらんと思へば

(後撰・秋中・三三八・兼覽王)

などにも見られ、「女郎花」が女性の比喩であることはもとより、「霧」
には何らかの障害が寓されていよう。とすると、当該歌の下旬は片
桐氏が指摘するように「霧が立つ」に掛けて女の宮仕えを邪魔す
る人が立ち出て来ることを言「ったとみておくのがまずは穩当では
なからうか。

ところで、当該歌にみる「宮人」「女郎花」という用語の組み合
わせは珍しいものであり、他の用例としては躬恒詠(k)を挙げるにと
どまる。(k)は延喜十八年(九一八)九月二十八日、殿上人たちと東
山に遠遊したいわゆる晚秋遊覧行の一首で、当日不参加だった二人
に対して詠み贈ったもの。「宮人」は一行を、「女郎花」は宮中の女
房たちを寓しており、「一行の人数は判明したが、あの方ほどち
らと、女郎花が訊ねたら何と答えればよいのか」という皮肉交じり
の一首となっている。(k)は『古今六帖』(二・野辺・一二一七)に

も採られていることから、晩秋遊覧行歌の中では早くから世上に流布していたことが予想される。当該歌が躬恒歌(k)から表現受容を試みた可能性は決して少なくないといえよう。

以上、後撰集歌と躬恒集歌との表現的関連について、二句の表現が一致あるいは類似している例を見てきたが、多少の例外はあるものの躬恒集歌については比較的よく知られている歌が受容の対象となっているようである。屏風歌や『古今六帖』などの撰集類に採られている歌が目立つということは、それだけ人口に膾炙している可能性が高いと考えてよいであろう。この傾向は古今集所載歌と同断ではあるが、『後撰集』には素人歌人が多いという事情を勘案すると、まさに後撰集時代における躬恒歌の流布状況が如実に反映されているといつてよく、きわめて興味深い現象でもある。

最後に語句単位での考察結果について触れておきたい。後撰集歌と躬恒集歌との共通語句のうち、先行歌の用例が躬恒詠に限られるものを挙げてみたい。

〈花十にほふさかり〉⁽⁸¹⁾

衛門のみやすん所の家うづまさに侍りけるに、その花おもしろかなりとてをりにつかはしたりければ、きこえたりける

⑪山ざとにちりなましかば桜花にほふさかりもしられざらまし

(後撰・春中・六八・衛門御息所)

をみなへしおほかるところにて

(1)をみなへしにほふさかりを見る時は我がおいらくやくやしか

りける (躬恒集⑦二七九/後撰・読人不知)

〈こきもうすきも〉

(常夏に思ひそめては人しれぬ心の程は色に見えなん)

返し

⑫色といへばこきもうすきもたのまれず山となでしこちる世なし

やは (後撰・夏・二〇二・不知)

法皇の御ぶくなりける時、にびいろのさいでにかきて人におくり侍りける

⑬すみぞめのこきもうすきも見る時はかさねて物ぞかなしかりける (同・哀傷・一四〇四・京極御息所)

延喜十三年十月十五日、内裏きくあはせに右大弁のおほせによりてたてまつる

(m)きくの花こきもうすきもいままでにしものおかずはいろをみましや

(躬恒集③一三〇⑦一七三/延喜十三年十月十三日内裏菊合)

〈したのころ〉

まだ年わかかりける女につかはしける

⑭葉をわかみほにこそいでね花すすきしたの心にむすばざらめや

(後撰・恋二・六〇四・源中正)

うはせがは

(n)うはせ川したのころもしらなくにふかくもひとのたのまる

るかな (躬恒集③一六〇、延喜十六年斎宮名所絵歌)

【参考】

みくさ生ひてありともみえぬぬま水にしたのこころをしる人
ぞなき
(六帖・三・沼・一六八二)

〈おなじこと〉

時々見えけるをとこの、ゐる所のさうじにとりのかたをか
きつけて侍りければ、あたりにおしつけ侍りける

⑮ ゑにかける鳥とも人を見てしかなおなじ所をつねにとふべく

(後撰・恋三・七〇九・本院侍従)

(つるすにたてり)

(o) うらわきて風やふくらむおきつなみおなじところをたちかへ

りつつ

(躬恒集③一九、延喜七年九月十日宇多法皇大井河行幸和歌)

〈おぼろにみ「ゆ」+つき〉

ふちつぼの人々月夜にありきけるを見て、ひとりがもとに
つかはしける

⑯ 誰となくおぼろに見えし月影にわける心を思ひしらなん

(後撰・恋三・七三七・清正/清正集)

(p) あきのよのおぼろにみゆる月よりはもみぢのいろぞてりまさ
りける
(躬恒集③六〇・四七一⑦二二二)

〈つまつよひの〉

京に思ふ人侍りて、とほき所よりかへりまうできけるみち

にとどまりて、九月ばかりに

⑰ 思ふ人ありてかへればいつしかのつまつよひのこゑぞかなし
き
(後撰・羈旅・一三六五・不知)

(q) ひこぼしのつまつよひのあきかぜにわれさへあやなひとぞ
こひしき
(躬恒集③三五四⑦七、内裏屏風歌/拾遺抄・集/六帖)

恣意的に用例を選び別けたわけではないが、掲出の躬恒詠を見る
と(l)は『後撰集』入集歌、(m)は歌合歌、(n)は絵料歌、(o)は行幸和歌、
(q)は屏風歌で『拾遺抄』『拾遺集』にも採られ、早くから人口に膾
炙していた歌が多かったものと推察される。もちろん、⑪⑰のす
べてが躬恒歌から直接摂取を行ったとは考えがたいが、このような
類似・共通表現の存在は、『古今集』の陰に隠れていた表現が『後撰集』
になつてようやく表面化してきたことを端的に示している。上掲
(f)⑰の例も含め躬恒詠には晴の歌が比較的多いという事実は、そ
れだけ人々の耳目に触れる機会が多く、享受の対象になりやすかつ
たからではなからうか。そのように考えてみると、これら躬恒詠は
家集を媒介とした流布というよりも、口承ないしはメモ的な書承
を通して世上に広まつていったと考えたほうが理解しやすい。ある
いは『伊勢集』に混入しているような小規模の私撰集や屏風歌のみ
を集めた集成資料の存在を想定してもよいかもしれない。『後撰集』
にみる躬恒歌受容の様相は、勅撰集入集状況とはまた別の角度から
当時における躬恒歌のあり方を示唆してくれている。

四、おわりに

本稿では凡河内躬恒の和歌が、いわゆるハーフメイド式和歌作法を一つの特性とする『後撰集』の和歌にどれほどの影響を及ぼしているのかという点について考察を及ぼしてみた。その結果、次のような結論を得た。

- (1) 『古今集』所載の躬恒歌については、あくまでも「『古今集』の歌」という意識でその表現を受容しており、作者躬恒に対する特別な意識は感じられない。
- (2) 『躬恒集』所載歌についても、おおむね人口に膾炙している歌が表現撰取の対象とされているようである。屏風歌や歌合等の晴の歌や『古今六帖』『拾遺集』等の撰集類に採られた歌が多いが、そうした歌作はおそらく世上に流布しやすく、当時においては比較的よく知られていた可能性が高い。また、それらは口承あるいは家集とは異なった形での書承を通して世上に広まっていったのではなからうか。
- (3) 後撰集歌と躬恒集歌との類似・共通表現は、先行例を探し得ない例が多い。これは古今集時代においては顧みられなかった表現が、『後撰集』に至りようやく表面化してきたことを端的に示している。

今回は『後撰集』のみの考察に終始してしまったが、今後は後撰時代の私家集・歌合についても同様の検討を及ぼすことにより、当

代歌人たちの躬恒に対する意識や躬恒歌の流布状況について、少しでも明らかにしてゆきたい。また、貫之との比較もあわせて行いたい。

(注)

- (1) 以下、勅撰集の入集歌数歌数は『勅撰集付新葉集作者索引』(昭61 和泉書店)による。なお、『古今集』については異本歌を含めると計六二首となる。
- (2) 後世における躬恒歌の評価については、峯岸義秋氏『平安時代和歌文学の研究』(昭40 桜楓社)に詳しい。
- (3) 『新撰髓脳』の本文は『日本古典文学大系 歌論集 能楽論集』(昭36 岩波書店)に拠る。
- (4) 『古今集』秋上・三〇五に「亭子院の御屏風の絵に、河わたらむとする人の紅葉の散る木のもとに馬をひかへて立てるをよませ給ひければ、つかうまつりける」、『躬恒集』にも。なお、『九品和歌』「中品上」が引く今一首「遠方に萩刈るおのこなわをなみねるやねりそのくだけてぞ思ふ」は、『拾遺集』恋三・八一三では作者を躬恒とするが、『躬恒集』には見えず(内閣文庫蔵本の巻末増補を除く)、『深窓秘抄』四一では「無名」とする。ここでは躬恒歌としては扱わない。
- (5) 以下、和歌の引用については、断りのない限り『新編国歌大観』による。ただし、清濁は私意とし、一部仮名遣いを改めた箇所がある。また、私家集において第三卷・第七卷の両巻に収められている歌集は、③・⑦の符号で区別し、必要に応じて適宜異本文を注記した。
- (6) 『新編国歌大観』の底本は宮内庁書陵部蔵本(五〇一・一九六)。その親本たる資経本(『冷泉家時雨亭叢書 資経本私家集 二二平13 朝日新聞社所載)および承空本(『冷泉家時雨亭叢書 承空本私家集 上』平14所載)

も「躬恒貫之」の本文である。

- (7) 金子英世・小池博明・杉田まゆ子・松本真奈美・西山『千類集全釈』（平風間書房）参照。なお、『千類集』の成立は序によれば永祚二年（九九〇）十一月七日となるが、おそらくは虚構とみられ、実際は永祚二年をかなり下るものと考えられる。
- (8) 『無名抄』の本文は注(3)に同じ。
- (9) 平沢竜介氏『和歌文学大系19 貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』所載「躬恒集」解説（平9 明治書院）参照。
- (10) 源順歌にみる躬恒歌受容の具体相については、拙稿「源順と凡河内躬恒—その和歌表現の関連性について—」（『学海』一四号 平10・3）で論じたことがある。
- (11) 片桐洋一氏『後撰和歌集』の表現（『女子大文学国文篇』一六号 昭39・11、後に『古今和歌集以後』平12 笠間書院に収載）参照。
- (12) 私家集伝本の系統分類は原則として『私家集大成』による。
- (13) 『私家集大成』中古I「兼輔I」七九。
- (14) 『冷泉家時雨亭叢書 資経本私家集 一』所載。
- (15) 『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集 八』所載。
- (16) 片桐洋一氏校注『新日本古典文学大系 後撰和歌集』（平2 岩波書店）参照。
- (17) 工藤重矩氏校注『和泉古典叢書 後撰和歌集』（平4 和泉書院）参照。
- (18) ただし、白河切・堀川本・雲州本・承保三年奥書本および『古今六帖』一・雪・七四八では「心おきて」（岸上慎二・杉谷寿郎氏校注『後撰和歌集』昭63 笠間書院参照）。
- (19) 注(11)論文参照。
- (20) 拙稿「凡河内躬恒の表現—類歌から見えてくるもの—」（『和歌文学論集 古今集・新古今集の方法』平16 笠間書院所収）参照。
- (21) 『躬恒集』諸本は現時点では次のように分類されている。
- I (1) 時雨亭文庫蔵定家外題本
(2) 書陵部蔵（五一・二八） 光俊本

II 内閣文庫蔵本

III (1) 時雨亭文庫蔵本

(2) 書陵部蔵（五〇・一二三五）本

IV 西本願寺本

V 歌仙家集本、伝西行筆本

- I (1)は『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集一』、III(1)は『冷泉家時雨亭叢書 平安私家集九』、V伝西行筆本は『西行筆躬恒集』昭57 六興出版）、その他の伝本は『私家集大成』および滝澤貞夫・酒井修氏『校本凡河内躬恒全歌集と総索引』（昭58 笠間書院）を参照した。
- (22) 平沢竜介氏ほか『躬恒集』注釈（五）（『白百合女子大学研究紀要』三九号 平15・12）参照。
- (23) 『私家集大成』中古I「躬恒I」による。
- (24) 『拾遺集』では「かりてほす山田の稲をほしわびてまもるかりいほにい
くよへぬらん」（雑秋・一二二五）とあり、本文異同が甚だしい。
- (25) 『貫之集』には「春霞山郭公紅葉ばを雪もおほくの年ぞへにける」（六三六）の歌もあるが、該句を四句に据えたものではない。
- (26) 木船重昭氏『後撰和歌集全釈』（昭63 笠間書院）参照。
- (27) 注(16)に同じ。
- (28) 注(17)に同じ。
- (29) 注(2)に同じ。
- (30) この他にも、たとえば「ふたみ山ともにこえねどますかがみそこなる影をたぐへてぞやる」（後撰・離別・一三〇七・不知）は『躬恒集』所載の旋頭歌「ますかがみそこなるかけにむかひるて みるときにこそしらぬおきなにあふこちすれ」（⑦二二二）と二句に渡って表現の合致をみる。この旋頭歌は『古今集』元永本・志香須賀文庫本では一〇一〇番歌の次に「躬恒」として載せられ、『古今六帖』（四・旋頭歌・二五二七・みつね）・『拾遺集』（雑下・五六五・作者名なし）・『和漢朗詠集』（下・老人・七三二・作者名なし）に採られている。『躬恒集』はIV類本を除き「ますかがみ」の歌に続いて二首の旋頭歌を載せているが、これらは『古今集』一〇〇七（不

知、一〇一〇（貫之）に合致し、躬恒の詠とは認めがたい。「ますかがみ」の歌についても他人詠の混入である可能性を鑑み、ここでは考察の対象から除外した。

(31) 『伊勢集』にも「卯花のほふさかりは月きよみいねずきけとやなくほととぎす」(四四三)の一首を見出すが、該歌は古歌集混入部に存しており、『後撰集』所載の「卯花のさけるかきねの月きよみいねずきけとやなくほととぎす」(春下・一四八・不知)および『家持集』所載の「うのはなほふさつきの月きよみいねずきけとやなくほととぎす」(七〇)にはほぼ合致する。したがって用例からは除外した。

(32) 菊池靖彦氏『古今的世界の研究』(昭55 笠間書院)第三篇第一章「四『後撰集』の性格」に「ともすれば、『後撰集』独自の特徴をなすとみられるものが、けっして新しいものではないことがわかる。それはただ『古今集』の陰に隠れていたにすぎないのである」との指摘がある。

〔付記〕 本稿は上田女子短期大学助成費による研究成果の一部である。